

---

# 呼び声

長谷川 米華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呼び声

### 【Nコード】

N7024D

### 【作者名】

長谷川 米華

### 【あらすじ】

私が、まだ中学生の頃の話。自殺した彼女の霊が我々の前に姿を現す。あの頃の自身の行いに罪を感じながら、私は今を生きている。

## 第1話

- もう、15年以上も前の話になる。

30歳になろうかという今でも、あの声が聞こえてくる気がして恐怖を感じる瞬間がある。

目に焼きついた彼女の姿。感情を一切、感じとる事の出来ない眼。乱れた髪。足を引きずる音・・・。

一瞬でもあの時のことを思えだすと、背筋に冷たいものが走り、あの声が再び聞こえてくる気がして慌てて耳を塞ぐ。

- 15年前、私が中学2年生の頃の話だ。

浅木真紀子は、入学した当初は特に目立った所も無く、ごく普通の女の子だった。友達も4、5人はいただろう。そんな、彼女が陰口を叩かれるようになったのは2年生になってから・・・ある出来事がきっかけであった。

その日は、たしか酷い雨が降っていた。昼休みも外に出るわけには行かず、みんな教室に残り暇を潰していた。私も数人と壁に野球ボールを当てながら雑談を交わして時間を潰した。

壁に薄いシミが付いていた。私たちは無意識の内に、それを的に見立てボールを当てていた。1人がその的めがけて思い切り球を投げ、見事に素手でボールをキャッチして見せた。それをかわきりに競い合うようにして強い球を的の中央に当ててボールをキャッチす

る。

野球部の黒崎がここぞとばかりに球を投げつけた時だった。私のすぐ後ろから大きな悲鳴が聞こえた。黒崎は、その声に驚き球を捕り損ねて、ボールは床に転がっていった。

悲鳴を上げたのは浅木真紀子だった。その時の彼女の表情を思い出すことは出来ない。ただ、彼女を見た瞬間に只事ではないことだけは分かった。酷く震えながら、壁に向かって指を差している。何が起きているのか理解できぬまま、視線を彼女の指差す方へと向けた。

「顔が見える。壁に女の人の顔が見える。」

近くにいた友人にしがみつきながら浅木は壁に向かって指を差していた。その指の先は壁のシミを差しているように思えた。

「顔が紫色に腫れてる。あなた達に向かって何か低い声で唸ってる。誤ったほうがいいよ！」

半狂乱で叫びながら、彼女は床にへたり込んだ。片手で友人のスカートを握り締め、痙攣のように体を震わせていた。

その様子に冗談などと言っている事でない事は誰でも分かった。私たちは顔を見合わせ、息を呑んだ。

「やだ、声が近づいてきてる……！」

浅木は、そう泣き叫ぶと首を振りながら、四つん這いで教室の出口へと向かった。

静まり返っていた他の生徒たちも、その様子を見て悲鳴を上げて一斉に教室から飛び出していった。私たちも必死に走った。教室を出て、渡り廊下を走り、別棟の図書館の前まで逃げてきた。何かにつかまっていけないと立っていられぬほどに足が震えていた。

その騒ぎは、すぐに担任へと伝わり、私たち壁にボールをぶつけていた生徒数名は、壁のシミに向かって「すみませんでした」と誤らされ、とりあえずの決着をつけた。

午後からは教室では授業にならず、空いていた図工室を使った。浅木は、早退したようで次の日も学校に顔を出す事はなかった。

4、5日の間は、その出来事の話で持ちきりだった。浅木は、ちよつとした話題の人物になり、別の学年の生徒なども彼女のところに来て興味深く彼女の話聞いていた。

その出来事から、彼女は授業中に突如声を張り上げ、天井に向かって何か叫んだり。廊下を何かに追われているかのように泣きじゃくりながら走っていったりと奇行が目立つようになっていった。

やがて、よからぬ噂がたつ。浅木は、目立ちたくてあんなことをやっているのではないか？彼女に近寄ると霊が移る……。

浅木は、クラスで孤立していった。そして、すぐにそれはいじめへと移り変わってゆく。

彼女は、日に日にやせ細り、秋・紅葉の季節、電車にひかれて亡くなった。当時、遺書などは見つかっていなかったが、状況から見ても間違いなく自殺だったらしい。

教室には、彼女の座っていた椅子と机だけが取り残された。

彼女の遺書は思わぬ形で発見される。授業中、1人の女子生徒が教科書を投げ捨て突然泣き出した。先生が問いただしても、何も答えようとはしない。授業が終わり、彼女は皆の前で打ち明けた。教科書の中ほどのページ。そこに、赤い文字で“呪ってやる”と大きく書かれている。紙が破れるほどの筆圧で書かれていた。

皆、自然と浅木の席へと視線を向かわせた。他の生徒たちも教科書やノートを開いて確認する。私の教科書にもやはり書かれていた。最後の方のページに・・・呪ってやる。その隣のページにはペンを何度も突き刺したような穴が開いていた。生徒25人。全員、教科書、ノートのいずれかに同じ文字が書かれていた。

誰かが「持っていてられない」と教科書のそのページを破り、ゴミ箱へ捨てた。それに続き、まるで儀式のように、ゴミ箱を囲い、皆で破ったページをゴミ箱へと投げた。

こうして、彼女の遺書はゴミ箱へ捨てられ、学級委員の野田がすぐに焼却炉へともって行った。

## 第2話

そして、それからひと月が経った頃。

「お前、恭子の話を聞いたか？」

私は、何の事だ？と返した。すると、黒崎は私の手を引いて田中恭子の前まで連れて行った。

「恭子、昨晚、お前が見た話をこいつにもしてやってくれ。」

田中恭子は、親指を噛み締め泣いているようすであったが、やがて小さく頷いた。

昨晚、風呂に入っていた時の事だ。その日は、父親の食事会に両親ともに呼ばれ、家には恭子ひとりだけだったらしい。シャワーで頭を洗っていると誰かに名を呼ばれた気がして顔を上げた。シャワーを止め、辺りに耳を傾けるが声は聞こえてこない。 - 気のせいかな？

そう思い、再び蛇口に手を伸ばした瞬間、小さくだが再び自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。始めは、両親が帰ってきたのかとも思ったが、声質がまったく違う。首を傾げていると・・・。

「恭子・・・。」

驚き、恭子は持っていたシャワーをタイルに落とした。今度は、すぐそこ。風呂場の壁の向こうから聞こえてくる。

「恭子、開けて・・・窓を開けて・・・。」

曇りガラスの向こうに人の影が映っていた。声の主は、クラスメートの木ノ下智子だった。すでに、夜の8時は過ぎている。それも、玄関からではなく、直接風呂場で声を掛けてくるなんて・・・。眉間にシワを寄せていると。

「恭子、開けてよ。早く。」

影は、雲ガラスを激しく叩き出した。何かあったのだろうか？体を隠す事も忘れ、窓を慌てて開けた。

外の冷たい風が一気に風呂場に入り込んできた。濡れた、髪が急速に冷えてゆく。

目の前の光景に理解が出来ず、ただ硬直し立ち尽くしていた。

木ノ下智子。彼女の顔には首から下がない。

生首になった彼女は女に抱きかかえられていた。乱れた髪、青紫の肌。女の顔は頬から下の皮が殆んど剥がれ、骨が見えている。瞳孔の開いた眼。血と泥にまみれた制服。 - 浅木真紀子だ。

電車で轢かれた時のまま、彼女はそのままで姿を現した。死体。生気をまったく感じるものの出来ぬ死体が立ち上がり、木ノ下智子の生首を持って目の前に立っている。

声を上げることすら、眼を瞑ることすらできない。田中恭子は、ただ立ち尽くした。



浅木真紀子の口から小さなうめき声が聞こえてきた。そのうめき声が不思議と何を言っているのか恭子には理解できた。

・・・呪ってやる。呪ってやる。呪ってやる。

田中恭子は、気を失いその場に倒れ込んだ。

話を聞き終えた私は、すぐに教室を見渡し、木ノ下智子の姿を探した。黒板の前で他の生徒数名と笑顔で雑談を交わしている。

「どういうことだ。」

口に出してから、私はその質問がまったく無意味である事に気が付いた。

案の定、「分からないよ。」と、いう答えが恭子から返ってくる。

「木ノ下には今の話をしたのか？」

恭子は首を振った。もともと、今の話を本人にしていたら、あんな笑顔で友達と話などしていないだろう。

教室のドアが開き、担任の早瀬がパンパンと手を叩く。生徒たちは、一斉に自分の席へと戻った。

その時、まだ田中恭子には聞きたい事が沢山あったが、遂に聞くことは出来なかった。田中は、その授業中、気分が悪いと席を立ち、帰り道に車に轢かれて亡くなったのだ。

轢かれた場所は、浅木が電車に身を投げた場所から200メートル

ルと離れていない場所だった。

教室には、主のいなくなった机が2つに増えた。

### 第3話

私たちは気付かなかったが、田中恭子は随分と陰湿ないじめを浅木に繰り返していたらしい。浅木が目立ちたくて霊が見えるなどといっているのではないか？と言いつ出したのも田中だったという話も耳にした。

その時すでに田中の死が、浅木によるものと皆、確信していた。

ある日、掃除の時に浅木真紀子の机の裏にマジックペンで全員の名前が抱えているのを生徒の1人が発見した。

田中きょうこ、木ノ下とも子、黒崎大吾、山田裕香、大沢輝子、吉田一成、私の名前も上から数えて中程に書かれており、クラスメイト全員の名前が記してある。

「これって。」

その場にいた、数人の生徒は互いの顔を見合わせる。恐らくは、浅木真紀子をいじめていた、彼女がうらんでいた順番だ。彼女が亡くなる前に机の裏に書き記したのだろう。

3番目に書かれたのが黒崎である事が私には意外だった。

「田中、木ノ下、黒崎、まあ大沢輝子辺りまでは大分浅木のこといじめてたからなあ。」

誰かが呟いた。

「黒崎も？黒崎もいじめていたのか？」

「ああ、俺、見たよ。黒崎が田中達といっしょに……。ほら、お前も絡んでいた壁の霊の事件があったろ。壁に向かって頭を下げさせられて……。あれで黒崎、恥をかかされたと思ったんだろうな。浅木が自殺する前日だったかな？放課後、黒崎と田中恭子、あと木ノ下が浅木を教室に呼び止めて、壁のシミの辺り霊が見えたっていう辺りを蹴れて命令していたよ。浅木泣きながら随分嫌がっていたけど、壁に向かってごめんなさいってなんども誤りながら蹴ってたよ。それを見ながら3人はケラケラ笑ってさ。お化けはどんな顔してる？泣いているか？怒ってるか？なんて聞きながらね。あれは、流石にやりすぎだったよな。」

その事はまったく知らなかったが、私も壁に向かって謝ったことを何度か冷やかされたことがあったから、プライドの高い黒崎は随分と根に持っていたのかもしれない。

「黒崎に聞いたけど、恭子は、浅木の姿を風呂場で見て、翌日事故にあっただら？この名前って、浅木に殺される順番なんじゃないの？」

言った本人は冗談のつもりだったのだろう。しかし、書かれた順位が上の方の者には、笑い事ではない。現に田中恭子は亡くなっている。その場にいた中で、最も上に名前を書かれていた吉田一成が飛び掛った。

「冗談じゃねーぞ。なんで俺が……。俺は、何度かあいつの家に悪戯電話したただけだぞ。そんなことで、殺されてたまっかよ。」

吉田は、涙を流しながら馬乗りになって殴り続けた。

机の裏に書かれた名前の話はすぐにクラスメート全員に伝わり、木ノ下智子は次の日から学校を休んだ。

黒崎も学校には顔を出していたものの、とても会話を出来る状態ではなくなり、結局その日の3日後から学校に欠席し始めた。

黒崎が休みだしてから4日。担任の早瀬に頼まれて置きっぱなしの教科書を黒崎の家へと届けることになった。

## 第4話

黒崎とは、小学校からいつしよで母親も良く知っている。かなり、疲れた様子であったが、黒崎の母親は笑顔で私を出迎えてくれた。

すぐに帰るつもりであった私を母親は強引なまでに引き止め、リビングに通した。恐らく、黒崎は何も話していないのだろう。突然、様子がおかしくなった息子の原因を私から探り出そうとしている様子で、学校での彼の行動などを詳しく聞かれた。しかし、本人が隠している事をどこまで話しているものか分からない。あたふたしていると、2階から黒崎の声が聞こえた。

「おい、誰か来てるのか？」

母親は、私の名前を伝えると、本当に私なのかと何度も念を押し、黒崎は階段を下りてきた。目の下に隈ができ、やつれていた。

「よかった。お前が来てくれて、誰かに話さなきゃ気が狂いそうだった。」

黒崎は、涙ぐんで私の手をとった。

カーテンが閉めっ放しの彼の部屋に通されると黒崎はすぐに扉に鍵を閉めた。私をソファに座らせ、自分はベッドの上に腰掛けた。

「木ノ下は、無事か？」

私は頷く。

「学校には来ていないが、亡くなったとかそういった話は聞いてない。」

黒崎は安堵の溜息をついた。

「実は、俺の所にも来たんだ。浅木が……。」

「えっ。」

「5日前の晩だ。寝ていると、誰かが俺の名前を呼んでいる声で目を覚ました。俺の場合は山田裕香の声だった。時計を見たら深夜2時だぜ。しかも、ここ2階なのに声がどんどん近づいてくる。布団を被って必死にお経を唱えたよ。声は部屋の外をグルグル回っているようだった。」

「……で、どうなった。」

「どうもこうも、10分。いや、その時は、もっとずっと長く感じたけど、あとで時計を見たら10分ほどだった。それで声は消えた。」

私は、鼓動が早まっていくのを感じた。

黒崎は、もう1人でいると頭が変になりそうだと私に訴え、数日間泊まってくれと懇願してきた。正直、私はいやだった。しかし、すぐに私の所にも浅木がやってくるのではないか？その時、ひとりでは、私もどうにかなってしまいそうだと思い、結局親に連絡をとって2日間、黒崎の家に泊まることにした。

私が、泊まるということで黒崎も随分元気が出たようすで、彼の

母親は大いに私の事を歓迎してくれた。テーブルに乗り切らないほどの料理と私が飽きてしまっただろうからと新作のゲームを3本も買ってきてくれた。

そして、その晩のこと。深夜12時を回った頃。

ゲームをしながら、私はウトウトとし始めていた。黒崎は、明日も学校を休むつもりだろうが、私はそういう訳にもいかない。ゲームに夢中になっている黒崎を横目に深い眠りに入っていた。

「おい。おい。」

黒崎が、私の肩を揺する。

「お前、何かあったか？」

寝ぼけ眼で私は首を傾げた。

「いや、ごめん。今、寝てた。」

黒崎は、納得いかぬ様子で辺りを見渡す。そして……

「ほら、やっぱり声がする。お前の声じゃないか？」

「なに言ってるんだ。俺は、何も言っていないじゃないか。それに、何も聞こえてこないぞ。」

黒崎は、テレビを消して耳を傾ける。

「ほら、お前には聞こえないのか？声が近づいてくる。」



黒崎の顔は蒼白になり、私の腕にしがみ付いてきた。私も、怖くなり彼にしがみ付く。黒崎の視線が、カーテンの閉まっている窓に向いた。

「お前の声が、ほら、窓から聞こえてくる！俺の名を呼んでいる。助けてくれ！！！」

黒崎は、私の背中に隠れ、お経を唱え始めた。彼の手から振るえが伝わってくる。

いよいよ、私も怖くなり「部屋から逃げるぞ！」と叫んだ。

しかし、黒崎は、「ダメだ！窓やドアを開けたら浅木が部屋に入ってくるぞ。分かるんだ。俺にはわかる。部屋に入ってきたら殺される！」

そう言って、私の足にしがみ付いた。

壁にかかっている時計に目をやった。12時15分。私には、声が聞こえはしなかったが、それでも10分間、この状況が続くかと思うとすぐにでも気が変になりそうだった。

階段を駆け上ってくる足音が聞こえ、私と黒崎は同時にドアへと視線を移した。

「大吾、どうしたの？何かあったの？」

黒崎の母親の声だ。階段を駆け上りながら、こちらに声をかけてくる。助かった。私は、ドアへ駆け寄り、鍵を開けようとした。

「ダメだ、開けちゃ。浅木かもしれない。あいつは、誰かの声を借りて、俺たちを油断させようとしている。そうして、部屋に入って俺に呪いをかけるつもりだ。」

狂乱して、私の腕を黒崎は掴んだ。しかし、私はその腕を振り払い、鍵を開けた。もう、この部屋にいるのは耐えられない。それに、今の声は私にも聞こえていた。間違いなく、声の主は黒崎の母親だ。鍵を開けた瞬間にドアが開いた。黒崎の母親が息を切らして立っていた。部屋でうずくまる黒崎を見て「何があつたの？」と私に聞いてきた。

私がどう説明すればいいのか、頭の中を整理しているうちに黒崎がうめき声をあげ始めた。彼のうめき声とは別の方向から、

「黒崎……。黒崎……。」

テープをスロー再生しているような声が私にもはっきり聞こえる。自分の声のようにも思える。黒崎の母親の背後、暗闇の階段から聞こえてくるように感じた。

声は徐々に近づいてくる。闇の中に目を凝らす。足をするような音と共に人影が階段を登ってくる姿が見えた。

私は、言葉を発することすら出来ずに立ち尽くした。ただ、視線を反らすことも出来ない。

気が付くと浅木は目の前に立っていた。

乱れた髪、青紫の肌。骨がむき出しになった頬。感情のない、目

で私を見つめていた。手には、私の生首を抱えている。

遠くから、黒崎の母親の声が聞こえてきた。なにやら、心配した声で私の名前を呼んでいたが、それからの記憶はない。

目を覚ましたのは、自分の家のベッドだった。後で、聞いた話では私はその場で気を失ったらしい。しかし、私よりも大変だったのは黒崎の方で、彼は過呼吸で意識を失い病院に運ばれたそうだ。命に別状は無かったが、それ以来、彼は学校へ顔を現さなくなった。噂では、転校したという話も聞いた。

## 第5話

私は、その出来事から1週間ほど学校を休んだ。自身では、そんな気はなかったのだが、両親に聞くと、当時の私は突如、大声で叫んだり、いらいらした様子を見せたりと随分心配させたりらしい。

久々に学校へ行くと、教室から浅木の机がなくなっていた。代わりに黒板の横に御札が張られ、壁のシミもきれいに消されていた。

何でも、私が休んでいる間に、先生たちが人に頼んで教室を御祓いしてもらったらしい。数日後には私や他の生徒数名、保健室に呼ばれカウンセラーに治療も受けた。そのカウンセラーが言うには、浅木をいじめていて自殺まで追い込んでしまった心の傷が彼女の姿を映し出している、といったようなことを言っていたが、私にはピンとこなかった。

御祓いが効いたのか？カウンセラーの診断が良かったのか、わからないが兎に角、それ以来、浅木の姿を見たという話は聞いていない。

黒崎は、隣町の学校に転校したという話を聞いたが、あれ以来姿を見たことはない。

木ノ下智子は、学校を休みだしてから彼女の友人たちが何度か家を訪ねたが、彼女に会うことは出来なかったらしい。卒業名簿に名前だけは載っていたので、転校した訳ではないのだろうが、高校などこに進学したという話は聞いていないので如何したものなのか？

数年前に、中学時代の同窓会が行なわれた。黒崎や木ノ下の姿は無かったが、その時、早瀬先生から当時の話を聞かされた。

木ノ下や黒崎、そして私までもが学校を休み始めた頃、先生たちの間でも浅木の話が噂になっていたそうだ。

隣のクラスの顧問、茂木という若い女性の先生が部活の帰りに教室に寄ったらしい。その時、2 - 1。私達の教室にまだ生徒が残っているのを見て、驚いて声をかけた。もう、日が暮れ7時を過ぎている。しかし、その生徒は返事を返そうとしない。それどころか、一心不乱にノートに何かを書きつづっている。もう一度、声を掛けると生徒は立ち上がり、壁に向かって歩き、姿を消してしまった。

あれは、浅木さんではなかったのか？と次の日の朝礼で茂木先生が他の先生方に話した。すると、実は・・・と用務員の老人が口を開いた。

「実は、私も見ているんですよ。もう、何度も……。彼女、浅木さんが亡くなってから教室に彼女がいるのを……。浅木さんは珍しく私にも会々と元気に挨拶をしてくれる良い子だったから顔は良く覚えていた。あれは、間違いなく浅木さんだった。」

そして、次に学年主任、他のクラスの先生、遂には教頭までもが、私も見ていると明かした。5人が共通して見ているのは、2 - 1、クラスで机に座っている彼女の姿。恐らく、浅木は机に何か執着があるのではないか？と言う事で机をお寺で処分してもらうという事で話がまとまりかけた。しかし、肝心のクラスの担任、早瀬は首を縦に振るうとはしない。

早瀬先生は、彼女も一緒に卒業までクラスで過ごさせてやりたか

ったそうだ。

ただし、田中が事故にあい、私や黒瀬、木ノ下が学校まで休み、良からぬ噂がたっている。結局、早瀬先生がその晩からクラスを見回りにして、その際、浅木の霊が出たら皆が言うように机は処分する。しかし、浅木が姿を現すまでは、机を卒業までクラスに置いておいて欲しいという要望を半ば強引に早瀬先生が通すかたちになったらしい。

約束どおり、早瀬先生は一旦帰宅して、7時に学校に戻ると見回りを始めた。7時、9時、11時と2時間置きに見回りをする。1時に見回りをした時、風のせいか窓がカタカタ音をたてた。その音が、何やら浅木が泣いている音のように思えて、早瀬先生は咽び返って彼女の机の前で涙を流したそうだ。彼女の死について、先生も随分悩み通していたようだ。事実、先生は私達の卒業後に一旦教職を退いている。

先生は、その時、浅木の姿を見たかっただと言っている。彼女にせめて謝りたかったと……。しかし、浅木が先生の前に姿を現すことはなく、夜が明けた。

次の日の朝礼で早瀬先生は、他の先生たちの前で報告をした。

「昨晚の見回りでは、何も起きませんでした。今夜も見回りは続ける予定ですが、とりあえず彼女の机はまだ、教室に残させていただきます。」

その言葉に、他の先生たちの表情が一変した。

「早瀬先生、実はあなたには悪いと思ったが、机は昨日、早瀬先生

が家に帰っている時に私と教頭で処分する為にお寺に持っていたはずですよ。あなたが、戻ってくる頃には机は教室にはなかったはずですが……。」

用務員の老人の言葉で早瀬先生は、全力で教室へと走った。昨晚、泣いて詫びたはずの浅木の机はどこにもない。先生は天井を仰ぎ、手を合わせた。

その後、教室は御被いが行なわれ、壁のシミも塗り替えられた。

早瀬先生は、まだ、我々が2年になったばかりの時行なわれたソフトボール大会の時の写真。浅木の笑っている写真を卒業まで名簿に忍ばせて持っていたそうだ。

卒業式の際、先生は転校した黒崎を除く、田中、木ノ下と浅木3人の名前を他の生徒たちの最後に呼んで自身で卒業証書を校長から受け取っていた。その姿をみて、数人の生徒は涙を流した。

当時の先生は20代後半。今の私よりも年下であった訳だから、頭が下がる思いだ。

それなのに、私は未だに彼女に謝ることすらなく、ただ怯えている。

この話は、をしあなたwこ - + f f f 1 f 1 3 5 + || || @ f d  
f ふ あ d ふ え え w w w w r ヴ あ か え 3 r 2 3 r 2 r w w。 f f  
w ふ あ ふ え f w f g r g r g r g l e d g v c

c d d d — — — F ¥ ¥ ¥ ¥ w ; ; ; F A D S \* F \* + + + + ふ あ あ ふ  
あ f f f s ふ あ : え

c f s f g l r l l l l l l l l l r f f j j f f の f f f る  
f f f f う .



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7024d/>

---

呼び声

2011年6月27日08時25分発行